

● 東京外国語大学 (国立)

知的国際貢献の拠点として

学長
中嶋嶺雄

二十一世紀の大学像をめぐる議論

国際化、情報化、グローバル化という二十一世紀の不可避の歴史的潮流のなかで、日本の大学は果たして国際競争力をもち得ているのか、私自身が現在責任を負っている大学（東京外国語大学）は国際社会への貢献にそなえて、どのように変わらなければならないのか。学長として日夜考え、かつ改革しようとしてきたのは、これらの点であった。この間、わが国における大学関連の議論も活発になり、二十一世紀の大学像についても、理念と政策の両面から、かなり突っ込んだ本格的な論議が交わされていて、すでに具体的な提言もおこなわれている。

まず文部省の大学審議会は一九九八年十月に『二十一世紀の大学

像と今後の改革方策について』と題する答申を発表している。この答申は、「競争的環境の中で個性が輝く大学」というやや文学的な副題もさることながら、従来の審議会文書の枠を大きく超えた内容をもつものであり、たとえ答申の基本方策を批判する場合にあっても、決して無視することのできない意味をもっていた。具体的には、従来の高等教育で十分に位置づけられていなかった大学院の教育・研究体制を明確にし、とくに高度職業人養成の問題を政策化したことなどが特徴的であった。大学審議会は引き続き国際化、グローバル化の問題や情報革命の問題に取組み、二〇〇〇年十一月には『グローバル化の時代に求められる高等教育の在り方について』と題する答申をおこなっている。まさに二十一世紀の最終段階でまとめられた大学審議会の最後の答申であったが、二十一世紀の大学が当面する新しい課題に挑戦しようとするものであり、日本の大学の国際化や留学生政策にも具体的に言及している。この間、一九九九年からは国立大学の設置形態に関する問題、とくに独立行政法人化の問題が大きくクローズアップされるとともに、評議会と教授会の関係など大学運営の改善をはかる目的で、学校教育法や国立学校設置法などの大学関連の法律が改正され、二〇〇〇年四月から施行された。

なかなか進まない改革

こうして二十一世紀の大学像をめぐる論議と政策はかなり広範に提起されているのであるが、これらの改革方策が個々の大学において実行に移されるテンポは全般的に依然として遅々としている。私

二十一世紀のわが国の大学像や大学地図も、 国際比較の視点から大きく塗り替えられるだろう。

いえよう。東京外国語大学においても
一年間の英語による短期留学プログラム
としての ISEPTUS (International Student Exchange Program Tokyo

自身、アメリカの大学——カルフォルニア大学サンディエゴ校国際
関係・太平洋研究大学院 (IR/PS) ——で一年間教鞭をとった経
験から日本の大学の現状を批判したことが契機で一九九三年秋から
大学審議会特別委員を三期にわたってつとめ、一九九五年九月から
は学長にも就任したので、折りに触れて大学審議会の答申などを学
内に紹介し、二十一世紀の大学像に沿った大学改革の方向を示して
いるつもりではあるが、学内は永い歴史と伝統に安住してしまってい
るのか、小さな既得権の固持に執着してせめぎあっているからなの
か、改革がなかなか進まない。大学改革と国際競争力の強化をめざし
て、学長同士が夢を語り合ったことから始まった東京工業大学、一橋
大学、東京医科歯科大学との「四大学連合」構想に関しても、去る十
二月の評議会ではようやく満場一致の機関決定を見たものの、様々な曲
折や抵抗が学内にはあった。要は、文部省が主導したり、大学審議
会が提言したり、学長がリーダーシップを發揮して改革を進めようと
したりすると、必ず抵抗やサボタージュがあるという特殊日本的な大
学の体質が、とくに人文・社会科学系には多いのではなからうか。

これから重要となる国際比較の視点

そうしたなかで、留学生政策などは比較的的改革を進めやすいと

University of Foreign Studies) や UMAP (University Mobility in
Asia and the Pacific II アジア太平洋大学交流機構) のリーダーズ・プ
ログラムが実行されつつあることもあつて、このところ世界各国・
各地域からの留学生が急増しており、現在は約六五〇名と学生総数
の一五%に迫つていて、国立大学のなかでは最高の留学生比率に
なつている。留学生が増えるということは、それだけ国際競争力を
備えていることでもあるので、さらに改革を進め、大学の国際化
グローバル化をより一層推進することによつて、キャンパスが居な
がらにして異文化交流の拠点となり、知的国際貢献の一環を担う場
にならなければならないと、学長としては考えている。

いずれにせよ、今日のような歴史的な移行期においては、日本の
大学を国際的な座標軸と次元において位置づけ、いわゆるグローバ
ル・スタンダードで日本の大学を計ってみるといふ国際的次元での
大学評価がいまや是非必要だといえよう。なぜなら、国際化、情報
化、グローバル化が進展すればするほど、大学間の壁は低くなるの
であり、そもそも大学には国家や民族・エスニティーなどによる
障壁があつてはならないはずであるだけに、「日本人が日本語で日本
人に教える」といふ「知的鎖国」(intellectually closed shop) の状況
が一般的な日本の大学を、単に国内的な競争環境においてのみなら
ず、世界のなかで見るといふ国際比較の視点が不可欠だからで

ある。同時に、日本の大学をめぐるでも二十一世紀においては国際競争が研究、教育、人事、学生確保、施設整備などのあらゆる分野でいよいよ本格化するであろうし、二十一世紀のわが国の大学像や大学地図も、国際競争力を十分に備えた大学という観点から大きく塗り替えられ、あるいは再編されてゆくに違いない。

● (なかじま・みねお) 一九三六年生。国際政治学。著書『国際関係論』(中公新書)『中国に呪縛される日本』(文藝春秋)『北京烈烈』(筑摩書房)『現代中国論』(青木書店)。



Photo by Ichige Minoru

● 東京芸術大学 (国立)

感性教育

学長 澄川喜一

感性教育のはじまり

明治維新の五年前(一八六三)、伊藤博文ら五人の長州藩士が、ロンドン大学に留学した。その内の一人、山尾庸三は、グラスゴーに行き、昼間は造船所で働き、当時の進んだ西欧文明に衝撃を受けつゝ、新しい日本は技術立国を目指すべきだと、夜はアンダーソン・カレッジ(現在のストラスカイト大学)で学んでいる。

帰国後、先づ人材養成が第一と、人づくりは、ものづくり、圍ぶくりに通じると、工部大学校(現東京大学工学部の前身)の設立に尽力した。同時に、柔軟な発想と、常に創意工夫のできるバランスのとれた感性豊かな人材を、と、明治九(一八七六)年工部美術学校が開設された。我国最初の感性教育がスタートした。